

しいのき



お正月は子供が「神さま」

名誉館長 三隅 治雄

子供のころ、「もういくつ寝たらお正月…」という童謡を歌って、「はやく来い来い」と指折り数えて正月の来るのを待ちわびたものでした。いつもは口うるさい親たちも、正月は何でもさせ放題で、だから、子供たちは、もらったお年玉で気ままなショッピング。また、男の子は凧揚げや独楽まわし、女の子は羽根突き。室内でも、カルタ・双六・トランプなどなど連日遊戯に熱中したことでした。と言って、その遊戯をよくよく見ると、勝負を争う形のもので、凧揚げなどには、もともと勝負で年の吉凶を占う意味がありました。また羽根突きも厄除けの目的で行ったと言い、古くは遊戯も神事だったのですね。そう言えば、各地の農村の風習に、小正月の夜子供たちが神様に扮して民家を歴訪し、祝福の呪いごとをして、そのお礼に金品をもらうことがあります。魂のうぶで清らかな子供には神がやどると信じて、新春に来る歳神の役を彼らに当て、年占いや魔除けの呪術をさせたのが本来でしょう。ならばお年玉は子供神へのご報酬かも。

文化財よもやま話

旧家の伝承

私たちの周りには、本当かどうか確認することは出来ないけれども、人々に信じられ、伝えられてきた事柄があります。旧家にまつわる伝承というのもその一つです。

例えば、『新編武蔵風土記稿』には、地誌的解説や村史、神社仏閣等を説明する記述とともに、村によっては、旧家に関する記述がなされています。それは、旧家である家の出自あるいは先祖を説き、さらには、先祖の功績や、居住の時期・理由、旧家を証明する物といった内容にまで及んでおり、私たちは江戸時代後期の旧家とその伝承についてを、そこから知ることが出来るのです。

また、記録にみられるだけではなく、現在まで語られ続けている場合もあります。新井の旧家である窪寺氏に関する話の一端を紹介しましょう。旧家に関する話には、民俗的に興味深い内容が多く、語り伝えられた背景を今後考える必要があるでしょう。

新井村の草分け窪寺氏は、14世紀足利持氏の家臣左衛門義藤が祖先である。義藤は後に窪寺藤左衛門と名を改める。義藤は戦に破れ浪士となり、関東に落ちてゆく途中、下沼袋の善祥寺へ立ち寄り、住職の厚情により、現在の新井4丁目付近の山に横穴を掘り居住したという。後応永8年(1401)、新井薬師付近に住まいを移す。応永13年(1406)に見地があり、野地開墾を申しつけられ新田開発に取りかかる。義藤には長男藤左衛門、次男和泉、三男対馬の三人の子供があったという。

この新井の旧家窪寺家は、新井薬師にも深く関わりをみせています。新井薬師本尊は梅の木から出てきたとも伝えられていますが、一方で以下のようにもいわれています。

武州多摩郡新井草分人先祖の窪寺藤左衛門の三代が、藤左衛門所有の茶畑を開墾していた時、鍬の先に金物があり、取り上げて見ると薬師如来であったという。この後、仏を背負い里人の家々を尋ね歩き、如来の安置するべき寺社を建立した。

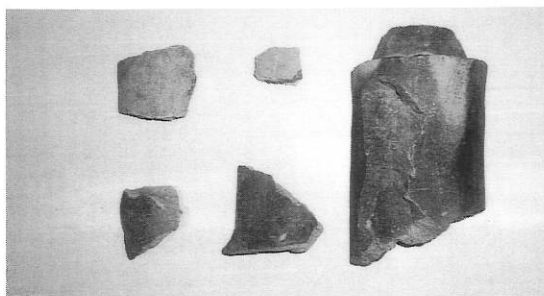
大地に眠る歴史

区内瓦葺きの建物はいつからか？

考古学でわかる日本で最初の瓦葺き建物は奈良飛鳥寺(6世紀末)です。さて、わが中野区ではいつ頃がそのはじまりでしょうか？

江古田一丁目の御嶽遺跡では今年度の調査で、溝の中から瓦片がいくつか発見されました。これらは、一緒に出土した志野焼や美濃焼などの陶磁器から、天正18年(1590)から寛永年間(1624~43)の瓦であることが分かりました。

さて、それではこの瓦はどのような建物に葺かれていたのでしょうか？



ちょうど、この頃は徳川家康が江戸に入り、都市整備が盛んに行われていた時代にあたります。

当時を描いた江戸図屏風を見ると、瓦葺きの建物は江戸城・大名屋敷・寺院の一部に使われていたにすぎません。思ったほど普及していなかったことがわかります。

中野区が江戸とは離れた純農村であったことを考えると、一般建物は茅葺きであったことは間違いなく、瓦を必要とする建物は寺院しか考えられません。

古い文献をひもとくと、江古田村の東福寺は天正年間から村内、御嶽の地にあったといわれ、火災によって寛永年間に現在地に移ったとされています。

御嶽とはちょうど御嶽遺跡周辺の地域にあたります。また、出土した陶磁器の年代も一致しています。ということは、遺跡から発見された瓦は移る前の東福寺、そしてそれが発見された溝も東福寺に関係する可能性が濃厚になったといえるでしょう。

そうすると、区内の最初の瓦葺きは1590年から1643年にかけて建てられた東福寺となります。

古文書つづり

灯台下暗し

「隋ひいより始めよ」との言葉があります。「遠大ひいの事をなす時は、まず卑近ひいな事から始めよ。転じて、事をおこすには、まず自分自身から着手せよの意。(広辞苑)」だそうです。

当館にご寄贈いただいた五月人形の箱のなかから、大正の頃と思われる文書が「発見」されました。当方で「小田原町貸座敷組合文書」と仮称しておりますもので、人形の包みやクッションに使われていた10種類14点の古文書群です。

人形を受入れた時点で中身の確認はしていたは



▲シワの痛々しい新「発見」古文書群の一部

ずですが、なぜか古文書としての分別を行っておらず、くわえて「発見」者から古文書担当に連絡がきても、実際に調査をす



▲発見時の状況

るまでに時間がかかり、つい先日まで包紙扱いという虐待を受けていました。

内容としては、いらなくなった帳面を破って包紙にしたらしく文書間の関連性は見出しにくいのですが、金銭出納帳が含まれることから当時の経営の一端を窺い知り得るものです。中野で保管するにはやや異質な史料ですが、どこで誰の役に立つか判りません。当館で大切に保存いたします。

いつも「文書は大切な歴史財産！」などと申しております者がこのようなことをしては本末転倒はなほだしいのですが、これも文書「発見」の一つの形態である、と自己弁護しつつ……

どこかの誰かにとって貴重な歴史財産、あなたのお宅にも埋もれていませんか？

中野往来

小川秀蔵の墓 中央2-33 宝仙寺墓域内

小川秀蔵は、中野で寺子屋が広まる以前に、中野村で数学の塾を開いていた、中野の教育の先駆者と言える人物です。

寛政11年(1799)に中野村名主が代官所に提出した「品々御尋書上帳」に「算術指南 百姓善左衛門店 周蔵」と記されており、同一人物だと考えられます。当時、江戸で盛んだった寺子屋は、手習いを中心でした。そんな中で、算術指南の寺子屋が、それも江戸近郊の村で成り立っていたのは、大工、水茶屋など34種類もの職種、172軒が立ち並んでいた青梅街道の街道筋であったからだと思われれます。

小川秀蔵の墓は、宝仙寺の大師堂脇の小道を左へ入り、墓地を少し歩いた左手奥にあります。墓石の正面に、「数学院解説道証信士」と刻まれているのがそれです。左右の側面には、子弟達が先生の遺徳を偲んだ碑文が、刻まれています。これに

よると秀蔵は、北総葛飾郡の生まれで、幼いころから機敏だったようです。最上徳内(天文学や数学にたけた北方探検家)について天文数学を学び、その奥義を極めました。その後中野村に移り住み、数学の塾を開いて、子弟に教えました。文化三年四月二十八日に病のため亡くなり、明王山宝仙寺に葬られました。



事業報告

各種事業経過

1996年10月～12月

事業名	内 容	期 間
特別企画展	「役者絵の極み 豊原国周の世界」	10/1～11/16
企 画 展	「お正月展」	12/20～
ミ ニ 展	「西の市と熊手展」	11/8～11/30
古文書講座	「入門コース」講師 大友一雄氏(国文学研究資料館国立史料館助教授) 白井哲哉氏(埼玉県立文書館学芸員) 小高昭一氏(松戸市立博物館学芸員)	10/19～12/14
史跡めぐり	「新井薬師・中野コース」講師 大辻英昭氏(元中野区文化財調査委員)	11/9
文化財調査	鷺宮地区民俗調査報告書刊行作業 新井・上高田地区民俗調査	継続中 継続中
埋蔵文化財調査	北原遺跡調査報告書 御嶽遺跡第二次調査報告書刊行作業 旧国立療養所中野病院跡地遺跡発掘調査 南台五丁目民有地立会調査・江原町二丁目民有地立会調査	96.11.刊行 継続中 継続中 11/5・11/21



▲史跡めぐり(たきびのうた発祥の地)

NEWS

※新刊案内※

『北原遺跡 発掘調査報告書』

定価 1,000 円

区内最西部に位置する、古墳時代集落跡の調査報告書です。6世紀初頭と7世紀初頭の典型的な土器のセットを報告しています。

NEWS

寄贈資料一覧

1996年1月～5月
敬称略・受入順

資料名	点数	氏 名
懐しの唱歌・童謡集他	2	保里 静枝
雛人形飾り	一式	本一老人会館
雛人形・道具	多数	米津富美子
雛人形	一式	中村 京子
雛人形	一式	下山 英子
出世鯉	1	酒井美意子
五月人形	一式	明 治 寺
障子	8	石井 幸弘
オルガンタンス	1	代居倫太郎
五月人形	一式	中野 明

◎貴重な資料をありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

入館状況

1996年9月～11月 (延71日間)

(人)

一 般	社教団体	学校教育	合 計
6,299	180	685	7,164

発行年月日 1997年1月1日

編集・発行  山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

〒165 東京都中野区江古田 4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 8 中教社第 9 号)